

第4回解答

1

問1

(1)

まず, $p \neq 1$ の時を考える. $z = x + iy, x, y \in \mathbb{R}$ と書くと, ヘルダーの不等式から, $\frac{1}{p} + \frac{1}{q} = 1$ となる q に
対し

$$\begin{aligned} |F(x + iy)| &\leq \int_{\mathbb{R}} \left| \frac{f(t)}{t - x - iy} \right| dt \\ &\leq \|f\|_p \left\| \frac{1}{t - x - iy} \right\|_q \end{aligned}$$

となる.

$$\left| \frac{1}{t - x - iy} \right| = \frac{1}{\sqrt{(t-x)^2 + y^2}}$$

だから,

$$\left\| \frac{1}{t - x - iy} \right\|_q = \left\{ \int_{\mathbb{R}} \left(\frac{1}{\sqrt{(t-x)^2 + y^2}} \right)^q dt \right\}^{\frac{1}{q}}$$

となる. $t - x = y \tan \theta$ と置換すると

$$\int_{\mathbb{R}} \left(\frac{1}{\sqrt{(t-x)^2 + y^2}} \right)^q dt = \int_{-\frac{\pi}{2}}^{\frac{\pi}{2}} \frac{|\cos \theta|^q y^q}{\cos \theta} \frac{d\theta}{y}$$

となるが,

$$\left| \frac{|\cos \theta|^q}{\cos \theta} \right| = |\cos \theta|^{q-1} \leq 1, \quad \theta \in \left(-\frac{\pi}{2}, \frac{\pi}{2} \right)$$

だから, 積分は有限の値を取る. したがって

$$C := \int_{-\frac{\pi}{2}}^{\frac{\pi}{2}} \frac{|\cos \theta|^q}{\cos \theta} d\theta$$

とすると,

$$\begin{aligned} |F(x+iy)| &\leq C^{\frac{1}{q}} \frac{y^{\frac{1}{q}}}{y} \|f\|_p \\ &= C_p \frac{1}{y^{1-\frac{1}{q}}} \|f\|_p \quad (C_p := C^{\frac{1}{q}} \text{としている}) \\ &= C_p \frac{\|f\|_p}{y^{\frac{1}{p}}} \quad \left(\frac{1}{p} + \frac{1}{q} = 1 \text{ を用いた}\right) \end{aligned}$$

を得るから, $F(z)$ は存在し, 問題の不等式を得た. 次に, $p=1$ の時を考える. ヘルダーの不等式から,

$$\begin{aligned} |F(x+iy)| &\leq \int_{\mathbb{R}} \left| \frac{f(t)}{t-x-iy} \right| dt \\ &\leq \|f\|_p \left\| \frac{1}{t-x-iy} \right\|_{\infty} \end{aligned}$$

となる.

$$\left| \frac{1}{t-x-iy} \right| = \frac{1}{\sqrt{(t-x)^2 + y^2}} \leq \frac{1}{y}$$

だから,

$$\left\| \frac{1}{t-x-iy} \right\|_{\infty} \leq \frac{1}{y}$$

となり, $C_p = 1$ として

$$|F(x+iy)| \leq C_p \frac{\|f\|_p}{y}$$

を得る. したがって $F(z)$ は存在し, 問題の不等式を得た.

(2)

$\delta > 0$ が任意に与えられたとして, $D := \{z = x + iy \in \mathbb{C} \mid \text{Im}z = y > \delta\}$ において $F(z) = F(x + iy)$ が正則であることを示せばよい. $z = x + iy \in D$ が任意に与えられたとする. $z + h \in D$ となる任意の $h \in \mathbb{C}$ に対して,

$$\frac{F(z+h) - F(z)}{h} = \int_{\mathbb{R}} \frac{f(t)}{(t-z)(t-z-h)} dt$$

となる. 従って,

$$\left| \frac{F(z+h) - F(z)}{h} - \int_{\mathbb{R}} \frac{f(t)}{(t-z)^2} dt \right| \leq \int_{\mathbb{R}} \left| \frac{f(t)h}{(t-z)(t-z-h)} \right| dt$$

である. ヘルダーの不等式から,

$$\int_{\mathbb{R}} \left| \frac{f(t)h}{(t-z)(t-z-h)} \right| dt \leq |F(x+iy)| \left\| \frac{h}{t-z-h} \right\|_{\infty}$$

を得る. 前小問の結果から,

$$\exists C_p > 0, \quad |F(x+iy)| \leq C_p \frac{\|f\|_p}{y}$$

が成立する. ここで C_p は p のみに依存する定数である. したがって, $z \in D$ から

$$|F(x + iy)| \leq C_p \frac{\|f\|_p}{\delta}$$

を得る. また,

$$\left| \frac{h}{t - z - h} \right| \leq \frac{|h|}{|\operatorname{Im}(t - z - h)|}$$

であり, $|\operatorname{Im}(t - z - h)| = |\operatorname{Im}(z + h)|$ および $z + h \in D$ から

$$\frac{|h|}{|\operatorname{Im}(t - z - h)|} \leq \frac{|h|}{\delta}$$

を得る. 以上により

$$\int_{\mathbb{R}} \left| \frac{f(t)h}{(t - z)(t - z - h)} \right| dt \leq C_p \frac{\|f\|_p}{\delta} \frac{|h|}{\delta}$$

となるから,

$$\lim_{|h| \rightarrow 0} \left| \frac{F(z + h) - F(z)}{h} - \int_{\mathbb{R}} \frac{f(t)}{(t - z)^2} dt \right| = 0$$

となり, $F(z)$ は D において正則である. よって示された.

(3)

$$\phi(s) := \frac{1}{\pi} \frac{1}{-s - i}$$

として ϕ を定めると,

$$\operatorname{Im}\phi(s) = \frac{1}{\pi} \frac{1}{1 + s^2}$$

であり, したがって

$$\operatorname{Im} \int_{\mathbb{R}} \phi(s) ds = 1$$

となる. $\phi_y(s) := \frac{1}{y} \phi\left(\frac{s}{y}\right)$ とする. $z = x + iy \in \mathbb{C}$ に対し

$$\phi_y(x - t) = \frac{1}{y} \phi\left(\frac{x - t}{y}\right) = \frac{1}{t - x - iy} = \frac{1}{t - z}$$

である. したがって

$$F(x + iy) = \int_{\mathbb{R}} \phi_y(x - t) f(t) dt = (\phi_y * f)(x)$$

となるが, f は実数値関数だから

$$\operatorname{Im}F(x + iy) = ((\operatorname{Im}\phi_y) * f)(x)$$

である. したがって, 定理 1.2.5 より

$$\lim_{y \rightarrow +0} \left\| \frac{1}{\pi} \operatorname{Im}F(\cdot + iy) - f \right\|_p = 0$$

を得る.

問 2

(1)

$\varepsilon > 0$ と $f \in L^p[a, b]$ が任意に与えられたとする。多項式近似定理から、ある多項式 $P(x)$ が存在して

$$\|f - P\|_p < \varepsilon$$

となる。そこで、 P を $\mathbb{Q} + i\mathbb{Q}$ 係数の多項式で近似することを考える。

$$P(x) = a_0 + a_1x + \dots + a_nx^n, \quad a_0, \dots, a_n \in \mathbb{C}, a_n \neq 0$$

$$Q(x) = r_0 + r_1x + \dots + r_nx^n, \quad r_0, \dots, r_n \in \mathbb{Q} + i\mathbb{Q}$$

とする。 $c = \max\{|a|, |b|\}$ とおくと、任意の $x \in [a, b]$ に対して

$$\begin{aligned} |P(x) - Q(x)| &\leq \sum_{i=0}^n |a_i - r_i| |x|^i \\ &\leq \sum_{i=0}^n |a_i - r_i| c^i \end{aligned}$$

となるので、各 $i \in \{1, \dots, n\}$ に対し

$$|a_i - r_i| \leq \frac{\varepsilon}{(n+1)c^i}$$

となるように r_i を取ると、

$$\|P - Q\|_\infty \leq \frac{\varepsilon}{n+1} \times (n+1) = \varepsilon$$

となる。したがって、

$$\begin{aligned} \|P - Q\|_p &= \left(\int_a^b |P(x) - Q(x)|^p dx \right)^{\frac{1}{p}} \\ &\leq \left(\int_a^b \|P - Q\|_\infty^p dx \right)^{\frac{1}{p}} \\ &\leq \varepsilon (b-a)^{\frac{1}{p}} \end{aligned}$$

となり、

$$\|f - Q\|_p \leq \|f - P\|_p + \|P - Q\|_p \leq \varepsilon(1 + (b-a)^{\frac{1}{p}})$$

である。以上により、 $\mathbb{Q} + i\mathbb{Q}$ 係数の多項式は $L^p[a, b]$ で稠密である。このような多項式全体は可算だから、 $L^p[a, b]$ は可分である。

(2)

任意の $n \in \mathbb{N}$ に対して、 $f \in L^p[-n, n]$ を $[-n, n]$ の外では 0 として延長すれば、 $f \in L^p(\mathbb{R})$ である。この意味で $L^p[-n, n]$ を $L^p(\mathbb{R})$ の部分空間とみなす。

$$\cup_{n=1}^{\infty} L^p[-n, n]$$

が $L^p(\mathbb{R})$ で稠密であることを示す。これが示されれば、前小問の結果から、各 $L^p[-n, n]$ は可分であり、従って $L^p(\mathbb{R})$ が可分であることが従う。 $f \in L^p(\mathbb{R})$ が任意に与えられたとする。 $\|f\|_p < \infty$ より、

$$\forall \varepsilon > 0, \quad \exists n \in \mathbb{N}, \quad \left| \left(\int_{-n}^n |f(x)|^p dx \right)^{\frac{1}{p}} - \|f\|_p \right| < \varepsilon$$

となる。ここで f の $[-n, n]$ への制限は $L^p[-n, n]$ に属するから、特に $\cup_{n=1}^{\infty} L^p[-n, n]$ に属する。従って、 $\cup_{n=1}^{\infty} L^p[-n, n]$ は $L^p(\mathbb{R})$ で稠密である。

問 3

(1)

背理法で証明する。 $\{x^n\}_{n=1}^{\infty}$ を l^{∞} の稠密な可算部分集合とする。 $E \subset \mathbb{N}$ に対して、 $a^E \in l^{\infty}$ を

$$a_n^E = \begin{cases} 0 & (n \notin E) \\ 1 & (n \in E) \end{cases}$$

として定める。

$$A := \{a^E \mid E \subset \mathbb{N}\}$$

として A を定義すると、 A は l^{∞} の部分集合である。 $E, F \subset \mathbb{N}, E \neq F$ の時、定め方から

$$\|a^E - a^F\|_{\infty} = 1$$

となる。今、 $\{x^n\}_{n=1}^{\infty}$ は l^{∞} の稠密な可算部分集合だから、

$$\forall E \subset \mathbb{N}, \quad \exists n_E \in \mathbb{N}, \quad \|a^E - x^{n_E}\|_{\infty} < \frac{1}{3}$$

となる。 $E \subset \mathbb{N}$ に対してこのような $n_E \in \mathbb{N}$ を対応させる写像を考えると、自然数の部分集合全体は自然数より真に濃度が大きいから、この写像は単射ではない。すなわち、

$$\exists E, F \subset \mathbb{N}, \quad E \neq F, \quad n_E = n_F$$

となる。この時、

$$\|a^E - a^F\|_{\infty} \leq \|a^E - x^{n_E}\|_{\infty} + \|x^{n_E} - a^F\|_{\infty} < \frac{2}{3}$$

となるが、前述したとおり $E \neq F$ だから $\|a^E - a^F\|_{\infty} = 1$ であり、矛盾が生じる。よって、 l^{∞} は可分ではない。

(2)

$a = \{a_n\}_{n \in \mathbb{N}} \in l^{\infty}$ に対し

$$f(x) = \begin{cases} 0 & x = 0 \\ n(n+1)(a_n - a_{n+1})x + (n+1)a_{n+1} - na_n & \frac{1}{n+1} \leq x \leq \frac{1}{n} \end{cases}$$

という関数 ($x = \frac{1}{n}$ の時 a_n となる折れ線) を対応させる写像を考える。対応先の関数は $L^{\infty}[0, 1]$ に属する。この写像は明らかに線形であり、 $\|f\|_{\infty} = \|a\|_{\infty}$ となるから、 l^{∞} は $L^{\infty}[0, 1]$ に等長に埋め込まれる。 l^{∞} は可分でないから、 $L^{\infty}[0, 1]$ も可分ではない。